©Joel Sternfeld, Courtesy PaceWildensteinMacGill

Design / MATCH AND COMPANY

Forest behind Park-and-Ride Area, Interstate 84, Patterson, New York, November 1995

Anna Lopez's body was found in these woods on May 25,1992. Lopez was one of seventeen women murderd by confessed serial killer Joel Rifkin. Speaking about her daughter Anna, a prostitute addicted to drugs, Marcia Alonso said, "Her problems made me love her even more, because girls like her are... so full of pain."

鬼畜大宴会

熊切和嘉初監督作品

ベルリン国際映画祭正式招待作品
第20回ぴあフィルムフェスティバル
PFFアワード'97準グランプリ受賞作品

製作・監督・脚本・編集＝熊切和嘉　製作・録音・音響＝財前智広　撮影＝橋本清明　照明＝向井康介　撮影助手＝近藤龍人、山下敦弘　記録＝前田隼人、金井亜由美、増泉路子　美術＝安井聡子　音楽＝赤犬　音響効果＝松本章　タイトル＝沢田まこと　ベストボーイ＝村主岳史　特別協力＝宇治田隆史　出演＝三上純未子、澤田俊輔、木田茂、杉原敏行、小木曽健太郎、財前智広、平良勤、東野哲也、仙田学、橋本裕二

1998年／35mm／106分／カラー／スタンダード

制作・配給＝鬼プロ

解説●'97年暮れから、東京、大阪、京都、ベルリン等の映画祭で紹介され、観客はじめ映画関係者の間で密かな噂となっていた問題の映画、それがこの「鬼畜大宴会」だ！　70年代学生運動グループを題材に、人間の欲望やモラルの裏側を見つめる鋭い視線、圧倒的にパワフルな映像と脳髄を直に刺激する音響効果により、観る者すべての心に一生の傷を負わせるこのアナーキーな問題作「鬼畜大宴会」が35ミリ完全版となって、遂にそのベールを脱ぐ！

監督は、1974年生まれでこれが長篇初監督となる23歳の鬼才・熊切和嘉。本作は彼が3年の歳月をかけて完成させた執念の力作である。'97年16ミリ版完成後、ぴあフィルムフェスティバルで最終審査員たちに驚嘆を持って受け入れられ、準グランプリを受賞。その後も各界のクリエイターたちを震撼させ続け、各方面から続々と衝撃の声が寄せられている。また、世界3大映画祭のひとつである、ベルリン国際映画祭にも正式出品され、物議を醸した。さらに海外からは、引き続きトロント国際映画祭、タオルミナ国際映画祭をはじめ、10ヵ所以上の映画祭から招待が届いている。'98年、世界中に波紋を投げかけるであろうこの問題作を、今ここで観ない手はない。ただし、観た者すべてが"背骨を抜かれる思い"となることは、まず間違いない！

物語●70年代。ひとつの左翼グループが、薄汚れた文化住宅の一室をアジトとして集まっていた。メンバーはカリスマ・相澤の信奉者たち。相澤は獄中におり、出所までの組織の実権は、彼の恋人・マサミが握っていた。だがそのやり方に信念や展望はなく、アジト内の人間関係は徐々にすさみ始めていく。そんな頃に起こったある事件をきっかけとして、彼らは後戻りできない狂気と暴力の世界へと暴走していく　。

各界から寄せられた衝撃と絶賛の声

※五十音順

●シンプルかつクールな視線劇のさなか、近代日本百年のゾンビーズが血の海にのたうつ。**単性生殖**のプニュエルの孫？…かどうかはどうでもいい。要はクマキリ氏がモノホンだってことさ！（青山真治・映画監督）●見事なまでにバタバタと人が殺されていく…面白い。熊切和嘉は勇敢にもその点に勝負をかけたようだ…私は**動揺**した。（黒沢清・映画監督）●若き天才、熊切監督がスクリーンの中で、『ことなかれ主義』の時代にツバを吐く。そのレジスタンスを**目撃**した君は、もうただの観客ではいられない［抜粋］。（秋元　康・作詞家）●リアルな映像と演じる役者たちの迫力に、首根っこをつかまれたように身動き出来なくなる。**神経**を犯される覚悟で見ないと、見終わった後しばらくは体調を崩すであろう。それぐらい恐ろしく強烈に面白い作品だ。（斎藤綾子・作家）●【『鬼畜大宴会』へのブレイクアップ的共闘宣言】よくも、まあ、こんな物語を作ってくれたものだ。一切の情感をぶった切り、人間存在への限りなき悪意に満ちた否定。［中略］熊切和嘉の力技は、我等の世代をして、潜在する破壊への衝動を刺激する。諸君、この**醜悪**な物語は必見である。（崔　洋一・映画監督）●不意打ちだった。このシャイてぶてしい二十三歳の才能に振り回されっぱなしの二時間だった。荒れ狂う暴力と不可思議な静けさが画面の中で同居する。何人ももはや黙って**凝視**するしかない『絶対的映画』。（三枝成彰・作曲家）●この映画には激し過ぎる**愛**が渦巻いている！（サブ・映画監督）●画面を真っ赤に染める夥しい血。扇情的な性描写。銃で吹き飛ばされ飛び散る臓器。題名が示す**確信犯**的な悪趣味の数々。それにもかかわらずこの暴力と裏切りと死に溢れた映画から滲み出て来るのは深い深い悲しみである。（篠崎　誠・映画監督）●誰にも真似のできない**絶対絶命**がこの映画にはあります。熊切君は絶体絶命に追い詰められた人間の浅ましさ、哀れ、純粋さ、汚辱を再現されています。真似ができないのは、とても常人には正視できない世界を造形するまでの熊切君の気迫と凝視力です。（篠田正浩・映画監督）●新しい世代の映画だ。今までの『日本人』という、ものは、わりと淡白なものを好み、映画に関してもドギツイものから目を反らす作り方をしていたが、この作品には目を反らさない逞しいエネルギーを感じた。『**日本人**』が変わりつつあるのでは…。（田原総一朗・ジャーナリスト）●この映画は絶対見てはいけない。もし不幸にして見てしまった人は絶対に他言してはならない。たとえ偶然見るハメになったとしても、そこで見た人、物、事を二度と思い出してはならない。さもなければ熊切和嘉の仕掛ける**ワナ**に必ずハマる。（西川りゅうじん・マーケティングコンサルタント）●どうしても撮らねばならなかった、という作り手の必然のある映画は強い。この映画を単なるエログロでかたづけられないのは、その切迫感故だ。中盤の林の中でのリンチシーンは二十三歳の監督とは思えない**演出力**を感じる［後略］。（橋口亮輔・映画監督）●「鬼畜大宴会」を観て、本当に**どぎも**を抜かれた。これほど加減ということを知らない映画があっていいものであろうか。思いっきり残酷で、思いっきりエロティックで、思いっきりおっかない映画である［後略］。（林真理子・作家）●狂気を描く監督の目が、冴え冴えと醒めきっている。映画の中で沸騰する狂気と、それを描く作者の、**水泡五度**の冷静さ。この温度差を最後まで保ちつづける力量は並ではない。新世代の誕生だ。（東陽一・映画監督）●監督の過剰なまでの悪意と怒りに満ちた執念が、ここまで直截で且つ徹底的に描破されてしまうと、僕は観終わった後に笑みを浮かべ**快感**に酔い痴れるしかなかった。言葉は悪いが、そう思わせる監督の愚直さが素晴らしい。拍手！（松井誉士（良）彦・映画監督）●弱冠二十三歳の熊切監督が描く七十年代のエネルギーは、久しく日本映画が忘れていた**大島渚**の初期傑作群を想起させる［抜粋］。（宮島秀司・プロデューサー）●やろうとしている意図はわかるが表現がまだ**未熟**。次回作も観せてくれ！（若松孝二・映画監督）

10/17（土）～
ロードショー

前売券　¥1400
当日一般¥1700
当日学生¥1400

ホワイティ梅田泉の広場M-10右上がる東へ5分
扇町ミュージアムスクエア
06-361-0088

10／16（金）PM4:00～
「公開前夜祭パーティー」
at難波ロケッツ
問：06-649-3919